

医師としての茂吉は、明治四十三年（一九一〇）満二十九歳で東京帝国大学医科大学卒業後、同大学助手として付属巣鴨病院に勤め精神医学を学びます。その後、大正六年（一九一七）三十五歳で長崎に行き、長崎医学専門学校の教授として大正十年まで精神医学と法医学を学生たちに教えます。

そして、同じ年の十月にはヨーロッパに渡り、オーストリア・ウィーン、その後ドイツ・ミュンヘンの大学研究所で医学研究を重ねて論文を作成、大正十三年（一九二四）東京帝国大学医科大学より医学博士の学位を受けました。

大正十四年一月に帰国しますが、その前年の暮れに青山脳病院（養父紀一が院長）の焼失により、病院を建てなおすため、帰国早々大変苦勞することになります。昭和二年（一九二七）四十五歳の茂吉は、世田谷区松原に再建した青山脳病院長として、昭和二十年に郷里金瓶へ疎開するまで医業に従事します。

屈まりて脳の切片を染めながら
通草の花をおもふなりけり

歌集『赤光』

ぎりぎりに精を出したる論文を
眼下に見をりかさねしままに

歌集『遠遊』



学位論文

茂吉の医学博士論文となったのが「まひせいちほうしや麻痺性痴呆者の脳図」です。これはウィーン留学時代に、マルブルク教授の指導のもと完成したものです。この研究は今では進行麻痺と呼ばれる病気で、野口英世博士が本病者の脳内に、はじめて病原体を発見しています。茂吉はこれを根気強く取り組み、完成するのに一年半を要しました。